

アトリエ 琉游舎 だより 25号

2018年4月25日発行

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

5月は何でも三昧

☆三昧（さんまい）は心を一つの対象に集中して動揺しない状態を言います。
 ☆5月は爽やかな季節。何をすることも集中して一つのことに打ち込める時です。
 ☆スポーツ三昧、勉強三昧、遊び三昧、旅行三昧と人それぞれの三昧が楽しめます。
 ☆5月の琉游舎でもいろいろな三昧が楽しめます。読書三昧、おしゃべり三昧、昼寝三昧、勉強三昧、瞑想三昧、怠け三昧、飲食三昧、座禅三昧、何でも集中すればそれは三昧です。仏教では三昧の境地に入れば雑念が消え去り、没入することで対象が正しく捉えられると言われていています。そうなんです。三昧はとても重要な行いのひとつ。
 ☆さあ皆さん、5月は何でも三昧の季節です。思い思いの三昧にふけて、爽やかな5月を楽しみましょう。

※ゴールデンウィーク前半4月28-30日の間、琉游舎は申し訳ありませんが休舎します。

5月1日(火)
5月6日(日) **写経会**
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

読書会
5月8日(火)
13時半から

詩話会
5月12日(土)
13時半から

5月のスケジュール

| | | | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----------|----------------------|----|--------------------|---------------------|--------------------|-------------------|
| | | | 26 映画会 13:30 | 27 | 28 休舎 | 29 休舎 |
| 30 休舎 | 5月1日 写経会 13:30 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 写経会 13:30 |
| 7 | 8 読書会 13:30 | 9 | 10 映画会 13:30 | 11 | 12 詩話会 13:30 | 13 |
| 14 | 15 | 16 | 17 映画会 13:30 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 読書会 13:30 | 23 | 24 映画会 13:30 | 25 居酒屋の会 16時～ | 26 | 27 |

田んぼに水が入り、代掻きが始まりました。そろそろ田植えも見られるようになりますね。川から小川、小川から田んぼのあぜ道の用水へそして田んぼへと、水が勢いよく流れ始めました。いつか水面の光の反射で大地がキラキラとまぶしいくらいに輝きます。やがて苗が植えられ、鮮やかな緑が水面にやさしく反射し揺らめきます。そうすると春の蛙の合唱も聞こえてきますね。そして稲の成長にしたがって大地は緑に覆われていきます。気が早いようですがじきに夏です。ところで最近あまり蛙の鳴き声が聞こえませんが、どうしたのでしょうか？

春の蛙で思い出しました。曹洞宗の宗祖道元の「弁道話」という著作に「声を暇なくせる、春の田の蛙の昼夜に鳴くがごとし、ついにまた益なし」と書かれています。前文から素直に読めば経や念仏や題目をただ唱えるだけでは、春の田んぼに鳴く蛙のごとくなんの役にも立たないといっているようです。悟りに至る道はただ座禅修行の中にのみあるということを書の中の言葉です。念仏や題目を悟りへの道と信じている人にとってこの言葉は受け入れ難いでしょうが、逆にただ坐っているだけではそこら辺の石ころと同じで邪魔なだけだとも反論できるのです。私は悟りへ至る道が座禅であろうが念仏であろうが題目であろうが、その議論はやすらぎのところにたどり着くためには無意味なことだと思っています。そのような宗派的形式論に執着しては、お釈迦様を善知識として伴に歩むことなどできないと思うのです。もしお釈迦様が題目を知らなかったら、題目を唱えるようにお釈迦様に強制（折伏）するのでしょうか。

仏教はお釈迦様がなくなられた後は分派活動、異端活動の繰り返しだったのです。ですから唱える経も悟りに至る方法も千差万別。異端活動を正当化するために新しいお経が編み出されていきました。そして新しいお経とともに信仰形態とその対象である本尊に正当性が与えられていったのです。キリスト教では聖書とキリスト以外を信仰の対象としたものや、正統から外れたと判断されたものは、異端としてことごとく排除されてきたのに、仏教はなんと寛容でいい加減な宗教なのでしょう！

私は経典を読み始めたとき、一つのお経の中にもつじつまが合わないことが散見され、ましてや異なるお経になると正反対の主張をしていることに違和感を覚え、同じ仏教というカテゴリーの中に正反対の教えがあることが不思議でなりません。もちろん現代のわたくしたちは、今残されている経典は百年以上にも渡って、ある人が自分の考えの正当性を主張するために、以前のお経に新しい主張を書き加えてきたということを知っています。ところが明治時代になるまですべての経典はお釈迦様の金口（こんく）と信じられていました。つまりお経はお釈迦様の生涯の中ですべて語られたものであると信じて疑われなかったのです。その結果、矛盾だらけの各経典を、すべてお釈迦様一人が語った言葉として、矛盾無く見えるように整理することに仏教は多くのエネルギーを費やしてきました。つい150年ほど前まで、文献批判とか文献比較という視点は全くなかったということでしょう。

中国や日本では、お経はすべて実在のお釈迦様の言葉であると固く信ぜられ、その前提の下に仏教活動のすべてがあったのです。この間違っただけで日本に移入された仏教が今ここにある私たちの知っている仏教なのです。とは言っても私は、お釈迦様の実際に語った言葉（原始仏典）に帰らなければいけないと言うつもりは全くありません。間違っただけで、異端分派活動の末に今ここにある仏教は、今この時代この環境にある私達には必要だから今ここにある、と考えたいのです。春の蛙と揶揄されようが、ただの石ころと無視されようが、それを行う人たちには、お釈迦様と同行して安らぎのところに辿り着く「行い」のひとつのカタチだと思うのです。このカタチは「信」のカタチです。

春の蛙が鳴いていることはただ益のないことなのでしょう？蛙は鳴かなければならないから鳴き、蛙なりに鳴くことが必要だから鳴いているのです。その理由は私には分かりません。恐らく蛙にも分からないかもしれません。同じように念仏や題目を唱えること、座禅を行うことも、理由を問い始めると、形式や現象の違いを強調し他を非難・排除する方向に行ってしまう。それぞれの行いのカタチはそれぞれの「信」によって支えられたかけがえのない「行い」です。異端も分派もすべて「私の教えの中にある」とお釈迦様がおっしゃってくれてきたからこそ、今ここにある仏教の教えが今ここにある、と私は考えたいのです。

もうとうに時効だと思うのでここに書きます。小学生の頃畦道を自転車で乗っていて田圃に落ちこちたことがあります。さいわい田植前だったので実害はなかったと信じたいのですがそのまま泥だらけで逃げ帰ってしまいました。農家の方ごめんなさい。

ところで今気がついたのですが「蛙」と「畦」、字がそっくりですね。

今年は畦道をゆっくり歩きながら、うるさくて耳を塞ぎたくなくなるくらいの蛙の声を楽しみたいと思います。

それではまた次号でお会いしましょう。（出琉）

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

Mail:toi101izuru@outlook.jp

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/